

集合的トラウマとしての原発分断、 修復に向けた介入研究

— 家族災害としての原発事故に着目して¹ —

成 元 哲
牛 島 佳 代

「原発事故は放射性物質だけをばらまいたんじゃないで、いろんなものをばらまいてくれたな。いろんなものを台無ししてくれたんだと思うと、腹ただしいなと思います。でも負けません。負けないし、避難したことは間違っていないって思っているし。言われたんですよ、あなたはどうぞせ秋田の人でしょって。秋田からお嫁になって福島にきて、それで京都に避難、簡単に考えられたでしょっていう、そんな感じのニュアンスのことをいわれる時があって、すごい悔しかったです。私はこの土地、福島、いわきに住んで一生がんばってこうと思って、子どもも産んで、そこで、本当にすごくいいところですよ、すごく綺麗なおとこなんですよ。だから・・・(涙)、またあの綺麗な青空、すごいいい青空なんですよ、すごい綺麗なんですよ。また汚染のない、綺麗な空気のところまで海を眺めて青空をみて、「わー！」とやりたい、本当に返してほしい、そう思っています。」

ドキュメンタリー映画『決断 運命を変えた3.11 母子避難』（安孫子亘監督、2024年）の「いわき市から京都市に避難した高木久美子さんの発言から」

1 本章は、JSPS 科研費（24330165、19H00614、15H01971）、トヨタ財団研究助成プログラム（D18-R-0325）の研究成果である。本章は「トラウマを抱えたコミュニティ：集合的トラウマの社会学」（『中京大学現代社会学部紀要』第16巻第1号所収）、「福島における分断修復学の創成：トラウマを抱えたコミュニティを回復の共同体に」（『中京大学現代社会学部紀要』第16巻第2号所収）、『原発分断と修復的アプローチ』（東信堂、2023年）の第1章と重なる部分があることを断っておきたい。

1. 集合的記憶として原発事故

自然災害と同様に、原発事故はそれまでの当たり前の日常を破壊する。とりわけ、長い時間をかけて育まれてきた自然環境を破壊し、人々の営みや人間関係も壊した。だが、13年の時間の経過は、当事者にも、奪われた日常の痛みの記憶を薄れさせている。普段、気にせず、話題にしなくなるが、癒えたわけではない。当事者が自分の物語を語るができるように、隠された傷を記録し、伝えていくことが必要である。だが、つながり続けることは容易ではない。

かつてジュディス・ハーマンは『心的外傷と回復』の冒頭で、「外傷をこうむった人の心理学的症状は、口に出せない秘密が存在することに注意を向けさせると同時に注意をそれから外らせるという二重の働きをする」²と指摘した。ただ、怖ろしい事件の真相を回想し語ることは、被害者個人の快癒と社会秩序の回復との両者の前提であるとも主張する。

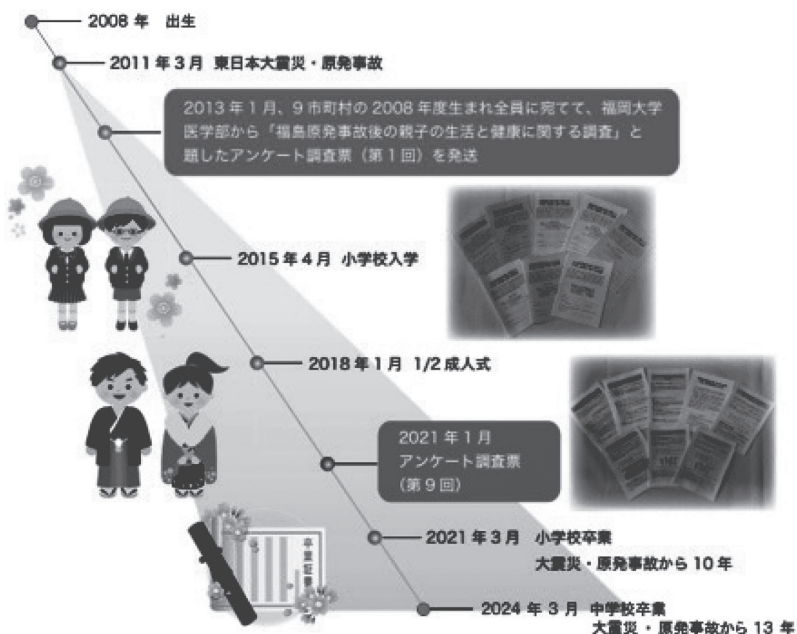
13年が経過した今の段階で言えることは、福島県中通りの人々が受けた傷、共同性の感覚を損なうものとしての集合的トラウマが完全に癒えたわけではないということである。彼らは失った財産への金銭的補償も、精神的な傷への補償も十全には受け取っていない。そのうえ、彼らは失った共同性の基盤を補償されることはなかった。それは、すなわち彼らが未だに居心地の悪い居場所で立ち往生し、宙づり状態にあるということを意味する。

私たち「福島子ども健康プロジェクト³」は、3・11と原発事故後、福島県中通り9市町村の2008年度出生児とその母親（保護者）たちが経験してきたことを記録として残す作業を続けている。今も、定期的に聞き取り調査と、3・11後をふり返り、語り合う「語り合いの場ふくしま」を実施し、集合的記憶としての原発事故を記録している。ただ、この記憶は、自ずと

2 Herman 1992=1999:xii-xiii

3 「福島子ども健康プロジェクト」のホームページ参照 (<https://fukushima-child-health.jimdofree.com/>)

永続するわけではない。時間とともに記憶は風化する。風化を防ぎ、被害を繰り返さないためには、語り部活動といったコミュニケーションによる記憶の想起と、調査記録の集積による情報の物理的記録（文化的記憶）という2つの方法によって維持されなければならない。記録なければ事実なし。私たちの調査対象は、3歳児健診が終了した時点から追跡し始めたが、2024年度、その子どもたちは高校生になった。将来、子どもたちが自分たちの記録を閲覧し、自分の物語を語ることができるようにしたい。それが目標である。



「福島子ども健康プロジェクト」による調査票調査「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」は、原発事故が子どもと家族、地域生活に与える影響を調査し、定期的に記録するためのものである。福島県中通り9市町村に住民票をおいた2008年度出生児とその保護者（母親）を

対象に、2013年から2021年まで毎年1月に、およそ15頁もあるアンケート調査を実施した。第1回調査（2013年1月実施）の調査票の最後のページに、「今後、調査結果を生かして、小さなお子さんを持つお母様たちが、原発事故や子育てに関する不安を自由に語り合う場を作りたい」と自由記述欄を設けた。この調査の回答者である一人の母親は、「この先も大丈夫と思っているママと、不安をかかえながらしょうがなく住んでいるママと移住計画中のママが語り合うなんて戦争」と書き込んだ。その時から、私たちの研究目的に、原発事故後の生活状況と健康状態に関する「実態把握」に加えて「分断修復」が加わった。

ここにおける分断とは、あえて問題に触れようとしめない空気感のようなものである。したがって、分断修復とは沈黙や対話の断絶・不在状態からの離脱を意味する。これまで10年余の間、原発事故後の生活と健康に関する実態把握のための調査だけでなく、調査票に書き込まれた膨大な数の声を報告者や論文という形でまとめてフィードバックした。また定期的に行ったインタビュー調査では原発事故後の家族の経験に耳を傾けた。さらに2019年からの「ふり返り手帳」制作では、それまでの個々の調査回答を調査参加者全体の中で位置づけ、まとめ、フィードバックし、調査参加者が自分の立ち位置と変化を相対化する機会を作ることを試みた。2020年からの「語り合いの場ふくしま」というワークショップでは、調査者が仲介し、調査参加者同士の語り合いの場を設けた。こうした一連の活動を通じて、福島県中通りにおける分断修復の試みを、試行錯誤と手探りで実行し続けてきたわけである。

本稿では、自由記述欄に記載された母親たちの声を分析することにより、原発事故が子育て中の母親とその家族にもたらした長期的な影響を明らかにし、このことにより、原発事故が子育て中の母親をターゲットとした「家族災害」であることを提示する。

2. 原発事故の家族体験

表1に「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」の回答状況を示した。表2は、本章で扱う第1回調査から第6回調査までの、それぞれの自由記述回答数と記入率を示した。自由回答は、先にも記した通り第1回調査のみ、「今後、調査結果を生かして、小さなお子さんを持つお母様たちが、原発事故や子育てに関する不安を自由に語り合う場を作りたい」として意見を求めたが、それ以降は、「今の心境を率直にお書きください」とのリード文により記載を求めている。第1回と第2回調査においては、記入率は5割を下回っているものの、第3回調査以降は、6割前後の記載率となっている。

分析は、筆者と福島子ども健康プロジェクト事務局のメンバーが原発事故後の家族関係の変化について言及した自由記述を取り上げ、分類した。その際、「親子関係」、「夫婦関係」、「その他家族（祖父母・親戚）との関係」の3つにカテゴリー化し、R.Hillのジェット・コースターモデルを参考に、家族の組織化の水準について「上がった」「下がった」「どちらでもない」の3つに分類し、その数を数えた。したがって、分類とその数は、読み手の主観的なものであることを予め断っておきたい。

表1 回答状況

第1回調査 (2013年)			第2回調査 (2014年)			第3回調査 (2015年)			第4回調査 (2016年)			第5回調査 (2017年)			第6回調査 (2018年)			第7回調査 (2019年)			第8回調査 (2020年)			第9回調査 (2021年)		
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
6191	2628	42.4	2628	1606	61.1	1605	1209	75.3	1297	1021	78.7	1026	912	88.9	1019	832	81.6	936	814	87	893	725	81.2	923	678	73.5
	1203			718			746			612			549			451			440			377			365	

A：調査対象者数 B：回答数 C：回答率（%）

下段：自由記述記入者数 2021年3月23日の時点での数（2021年6月10日現在：B:680）

表 2 自由記述の回答数と文字数

	回答総数 (2021年3月31日時点)	自由記述 記入数	記入率	文字数	一人当たり 文字数
第1回調査	2,628	1,203	45.8%	252,047	209.5
第2回調査	1,606	718	44.7%	153,938	214.4
第3回調査	1,209	746	61.7%	151,677	203.3
第4回調査	1,021	612	59.9%	117,171	191.5
第5回調査	912	549	60.2%	100,690	183.4
第6回調査	832	451	54.2%	82,812	183.6

2-1 親子関係

親子関係について言及している数は、第1回は108件と最も多く、次いで第2回では29件であり、第3回、第4回では10件前後、第5回では5件、第6回には0件となっていた。また、言及されているもののうち、そのほとんどが組織化の水準が下がったことを示すものであった。以下、「下がった」と分類された意見について、その内容ごとに見ていく。

表 3 親子関係における組織化の水準の推移

		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	計
組織化の 水準	上がった	3	1	0	1	1	0	6
	下がった	102	18	7	9	0	0	136
	どちらでも ない	3	10	0	2	4	0	19
合計		108	29	7	12	5	0	161

(1) 外遊びを制限することによる親子双方のストレス

- ・ 子供は敏感です。原発事故前までは普通に外遊びをしていたのに、事故後、1ヶ月以上もの間家から出ることのない生活でした。私は理解できなくとも全て子供に話し、外では遊べない事も”ごめんね”と伝えました。それまで外で遊びたいと言っていた子供も、今では「外は危ないから中に入ろう」と下の子を誘ってくれるようになりました。外遊びをしない事が、どれほどストレスがたまるのか、心、体の発達に影響があるのではないかと、随分悩みました。(2013：ID81)
- ・ 震災前に買った自転車はほとんど乗ることなく、サイズが小さくなってしまい、6歳の息子は未だに自転車に乗れません。震災直後、買い物に行き、途中大雨になりました。夫が店の側まで車をもってきてくれるのを店の軒下で待っていたとき、軒下から落ちてくる雨を娘がすくってなめました。その行為を見て私は「ダメ」とたたいて、怒ってしまいました。娘は何がダメなのかわかっていなかったようです。今まではこんなことで怒ったりしていなかったのに…と生活の変化に悲しくなり涙がこぼれました。(2013：ID351)
- ・ 自然がたくさんあるのに、草木花等にさわらせてあげることができない。海やプール、土のうえを素足で走らせてあげられないことが、親としてとてもくやしき、かなしいです。自分は自然にたくさんふれてそだったので、自分の子供にもたくさん自然にふれて、そのすばらしさや、大切さを感じてほしかった。子供は「何でふれてはいけないのか」分からず、話をしても納得できません。目に見えて汚染されているのであればわかりますが、それもなく子供にわかってもらうのはとてもむずかしいことです。(2013：ID1547)
- ・ 私には、小さい子供が5人います。原発事故後から、外であそばせるのをやめさせています。子供達には「どうして?」「何で?」と、なきながら言われ、それに対してどなりながら毎日のように怒っています。心の中で「ごめんね」と…。そんな子供達の姿を見ると、涙が出ます。(2013:

ID1779)

(2) 避難で家族が離れ離れによることによる親子双方のストレス

- ・原発後から、家族とはなればなれで、母子世帯です。たまに地元に戻省したりしましたが、私自身、精神的にまいっています。子供のため…と思ひ避難していましたが、子供の心の方が最近不安定になってきており、いままでガマンしていた事、本当はとてもさみしく家族と一緒に暮らす事をのぞんでいるようです。放射能から身体を守るのか、はなれていて心をきずつけているのか、もう、何をどうすれば子供にとって一番よいのかわかりません。安全・安心は本当にあるのでしょうか。本当の事を、TVや新聞でつたえてほしいです。(2013：ID787)
- ・家族がバラバラに避難をし（夫は仕事の為、福島に私と子供は実家のある県外に）当時2才だった子供は毎日父親の写メを見ていましたが、数週間経った頃、夜中に泣き叫び私をたたき始めました。聞く事も我慢していたのだと思います。また、思う事もうまく伝えられなかったのでは？(2013：ID974)
- ・震災当時は、娘が小さかったので何も言いませんでしたが、父親は福島で生活しているので、休みの時にこちらに来ますが、娘は父親が福島に戻る時、一緒に帰りがたり、毎回来る度に泣いて悲しい思いさせています。原発事故さえ無かったら、離ればなれの生活をおくることもなかったのに…。福島には、生活している人がいる、私が気持ちを切りかえたら、娘に悲しい思いをさせなくても良いのでは…。でも何を信じて、どうしたらいいのかまったく分からない…。なので、福島に帰れずにいます。(2013：ID1168)
- ・一番可愛い時期の子どもと離れて、なぜ働かなければならないのか？と毎日考えてしまうと夫は言っています。(2013：ID1799)

(3) 抑圧された状況で子育てすることに対するストレス

- ・長男（8才）は、外であそべなくなってから家の中にいるため、（ストレスもかなりたまっていました。）食べたり、ゲームしたり、体を動かす事が少なくなり体重も増えてしまいました。今は少しずつ短時間外であそぶ様になりましたがこのままの体形では肥満と診断されているのでなんとかしたいです。私もなにかとイライラする時が多くなり、ストレス発散する場、する時間も少なく、つい子供にあたってしまいがちになっています。（2013：ID1416）
- ・子どもにはあまり外で遊ばせてあげることもできず「県外にいた方が良かった」と言われたこともあり、やっぱり戻ってこない方が良かったのかと悩むこともありました。子どもはかんしゃくもちで暴れてしまうこともあり、子育てに悩み、泣いて過ごすことも多々あります。日々、育児、仕事、家事で忙しく疲れはててしまい、イライラしているので子どもが甘えたいときに甘えさすことも出来ず、子どもがかわいそうだなと思っています。日々いろいろなことに悩んでいます。（2014：ID874）

(4) 子どもの言動や行動に対するストレス

- ・子どもが外で草花、石、雪を触った時、「さわってはダメだよ！」と声をかけます。子どもが「ほうしゃのうだから？」と聞きかえすのを聞くたびに3才児の子どもが覚えるべき言葉なのだろうか…3才児が話す言葉が、放射能や線量計でいいのだろうか…と思い、心が痛くなります。（2013：ID807）
- ・子供の口から（お姉ちゃんが弟に対して）「ここはほーしゃのーいっばいだからさわっちゃだめだよ」と言っていたり、普通の5歳児は知らなくてもいい事を経験してるんだなと胸が痛みますね。（2014：ID823）
- ・下2人の子供は性格的なものなのかわかりませんが、すぐイライラしたり、怒ったりします。大声で騒いだり、親の言う事をきかなかったりします。原発事故後、落ち着かない生活だったのは事実です。その時々で

最善な生活は何かを考え今までやってきました。心配したり、甘やかしてきたのかもしれませんが。いろいろな面から下2人は上の子達より心身の成長が少々心配です。(2014 : ID990)

2-2 夫婦関係

夫婦関係について言及している数は、第1回が29件と最も多く、次いで第2回は16件であった。第3回以降は10件を下回り、減少傾向にあるものの、第6回においても5件の言及が見られた。また、それぞれの回での言及は、そのほとんどが組織化の水準が下がったことを示すものであった。以下、「下がった」と分類された意見について、その内容ごとに見ていく。

表4 夫婦関係における組織化の水準の推移

		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	計
組織化の 水準	上がった	1	1	0	1	1	0	4
	下がった	22	8	7	4	4	3	48
	どちらとも いえない	6	7	0	1	0	2	16
	合計	29	16	7	6	5	5	68

(1) 夫婦間の認識のずれ

- ・夫と避難するしないでけんかになりました。小学校に入ったばかりの上の子のことを考えると環境変化にともなうストレスを考えて避難できないという意見に「母親失格」といわれました。今でもその考えのちがいは平行線のままです。夫婦仲もあまりうまくいなくなり、子どもたちにストレスを与えてしまっています。どこにも自分の気持ちを話すことができず、毎日つらく死にたいと思ってしまいます。(2013 : ID210)
- ・本当に大丈夫なのかすごく不安です。しかし、福島にいと皆段々気にしなくなって、自分だけが気にしすぎているのかと不安になりま

- す。夫もこの地から離れる気はなく、避難するなら離婚すると言われており、避難ができずに今に至ります。(2013：ID2459)
- ・公務員の夫は転職を伴う転居にも、家族が別々に暮らすことにも乗り気でなく、私だけが空回りしあせています。震災以降、夫婦間での考え方のズレがどんどん大きくなっており、平和だった震災以前の生活が大変懐かしく思い出されます。こんな母親の状態を子供に知られまいと明るくふるまわなければならないことに一番疲れています。(2014：ID789)
 - ・昨年末離婚をして、現在シングルで子ども1人を育てています。結婚15年様々なことがあり少しずつお互いの存在や考え方にズレが生じてきていたのだと思いますが、大きな「亀裂」を生んだのは震災後の原発事故で幼い子どもをどう守るかという点だったように思います。子どもを思う親心にちがいはないものの母親のそれと父親のそれ（立場）はちがうものでした。とにかく我が子を守りたい一心の母親に対し、仕事や世間体、金銭的なものなど、現実を厳しくつきつけられ、まるで私たち母子がわがまま勝手にふるまっている様にみられていたのを知り情けない気持ちになりました。どこで大きくズレてしまったかはわかりません。でも心と体を支え合い依頼し合う夫婦、親子（父子）関係ではなくなっていたと感じます。原発のせいだけではないかもしれませんが、考え方や人生における優先順位のつけ方のちがいをつきつけられた結果だったと思います。(2014：ID1292)
 - ・主人との仲も決して良いとは言えず、話し合いをしたり、共に協力して何かをするということができず、いつも平行線で、私が一方的にののしられ、非難されるという状況が続いています。そんな中での育児はストレスの連続で、ときどきヒステリーとうつを繰り返しています。震災の時は、主人との認識のズレが大きく、その後の余震なども私とは考えが違い、お互いそれを譲り合うこともなく、私はだんまりを続けています。本当に必要のあることだけは話しますが、それ以外は沈黙です。何のた

めに一緒にいるのか…やはり生活の為でしかないと思います。(2017 : ID331)

- ・震災のことをはじめ、教育方針や家計の事などどんどん夫との考え方にちがいが出てきていて、全てのことを考えたりするのが私一人なので、常に何かを心配して、不安に思っ、家事や習い事の送り迎えなど…体調や精神的にも良くない状態が続いているのでとてもつらい毎日です。しかし、「気持ち弱いからだ！」と言われるだけなので今は本当につらいです。ただそれだけです。(2018 : ID441)

(2) 離れて暮らすことから生じるストレス（経済状態の悪化、意見のずれ違い）

- ・主人とも週末にしかあえず、あまりうまくいってません。同じような家庭がたくさんあると思います。もっと一家で避難を支援してくれると助かります。(2013 : ID724)
- ・色々考えて母子避難もしました。経済的にも苦しくて、家族離ればなれというのも、とてもつらくて1年しかできませんでした。(2013 : ID650)
- ・現在は自主避難中につき、子供と2人だけの生活です。一部屋でパーキングもないため、夫がきても泊まることもできず、家族3人で過ごす、ということが極端に少なくなりました。家族との時間を優先させるべきか、子供の健康を優先させるべきか迷う日々です。(2013 : ID1495)

2-3 その他の家族との関係

その他の家族（祖父母・親戚）関係について言及している数は、第1回が最も多く28件、第2回、3回までは10件を上回る言及が見られた。第4回以降は10件を下回り、減少が見られたものの、第6回においても3件の言及が見られ、そのうちの2件は組織化の水準が「下がった」ことを示すものであった。以下、「下がった」と分類された意見について、その内容ごとに見ていく。

表 5 その他家族関係における組織化の水準の推移

		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	計
組織化 の水準	上がった	3	2	2	1	1	0	9
	下がった	23	7	9	7	2	2	50
	どちらとも いえない	2	4	0	0	0	1	7
合計		28	13	11	8	3	3	66

(1) 主に祖父母との関係で、放射能に対する意識の違いによるストレス(食をめぐる意見の相違、検査していない食材を持ち込む、一緒に暮らすことによって生じるストレス)

a. 食をめぐる意見の相違

- ・ 去年の春に裏の山でとれた竹の子を義父が採ってきてくれた。一緒に同居しているので「食べたくない。食べさせたくない」とは言えない。自分達、孫達に食べさせたいと採ってきてくれるのは嬉しいが口にして良いものなのか不安になる。一度こういう内容で義母とケンカではないが意見の違いが震災後にあった。私の子供に思う気持ちが、平気で外の野菜を口にする義父母が許せなかった。(2014 : ID331)
- ・ 放射能汚染に関して理解があると思っていた主人の両親が徐々に変わって来ました。検査をしていない自家製野菜、海釣りの魚を(最近になっては)子供に食べさせようとしています。数年後に同居する予定なのですが、汚染対策の理解を得られないのであれば同居しない方向に話を進めたいのですが…現状に慣れてしまった人達が子供の安全を考えない様になって来たことに危機感を覚えます。主人方曾祖父に関しては自宅のある避難指示区域内でとったきのこを食べさせようとしたこともあります。(2014 : ID830)
- ・ 私の両親は放射能に対してはあまり深く考えていないので、子供と外であそんだり、自宅でとれた野菜や果物を食べさせたりしていました。私

は、孫と一緒にあそんでくれるのもありがたいし、自分が作った作物を食べてもらいたい気持ちも良く分かるので言いにくかったのですが、何度も「外には出さないで」「地元産のものは食べさせないで」「何のために避難しているか分からなくなる」と言ったり、自分でおかずを作って持っていったり、室内で遊べるおもちゃを買ったりしていました。
(2015 : ID679)

- ・食材に関しては今でも県産物は避けるようにしています。しかし以前からくらべると原発事故から、何年もたったんだから、とか、検査して大丈夫とされているからと言う人がさらに増え、今では県産物を避けていることをいうと神経質だと思われてしまうため、それらに関する話ではできない状況です。県産物や関東の食材は子供に食べさせないと何度も言っているにもかかわらず、同居している義母はそれらの食材を子供に食べさせていたり、私達にもってくるため、考え方の違いからストレスで仕方ありません。事故から4年もたつと、考え方が両極端となった印象で、おおいを吐き出したり、相談できる人が少なくなった気がします。
(2015 : ID913)

b. 同居によるストレス

- ・夫がない為、子供の事を思って実母と同居しました。5年前65才の母は、自分の人生を子守りで終わらせたくないと家出をし、1年と少しになります。不明です。心理的に井戸水を飲みたくなくなったり、(ペットボトルを買うようになった)住宅の除染にお金を使ったりした事で、イライラがつのり、子守りをする事が苦痛になったのではないかと思います。私が先に「もう死にたい」と言うと、孫はじゃまだから、三人殺してから死ぬと言われました。普通ではないと思います。(2016 : ID490)
- ・実家には、息子の部屋はない。母子2人でのんびりすごす、空間(部屋)がない、いつも老夫婦(祖父母)のみるテレビが無駄につけられた茶の間に横になることもできず、気をつかう毎日。食事の好みも生活時間(リ

ズム)もちがう2家族がムリやり同居することは、いくら血のつながりはあるとはいえども、実家とはいえども、せまい空間に多くの人々が寄せ合って暮らした仮設暮らしと似ている。子どももストレスから落ちつきがなくなり、言動が粗暴になってきたことが、心配。(2016: ID914)

(2) 親戚との付き合い方へのストレス (事故前は気にならなかった性格や言動が、気になるようになってきた)

- ・避難する側にもしない側にもそれぞれの考え方があり、尊重すべきであると思うし、私は避難しないことを親せき中に非難され、未だに子供達がかわいそうと言ってくる (2014: ID298)
- ・昨年8月に親せきで集まった際に『正直やっぱり福島には行きたくないし、物も食べたくない』と言われた時はハッとしました (2016: ID205)
- ・親せきに原発のことで避難生活をし、兄弟に世話になりっぱなしで、私の家にもしょっちゅう泊まりに来る人がいます。とても迷惑しています。いつまでも犠牲者のふりをして親切な人達にぶら下って生きていく県民にはなりたくないです (2013: ID746)

3. 家族災害としての原発事故

これまでも同調査の量的データを用いて、原発事故が親子の生活や健康・メンタルヘルスに影響を与えてきたことを報告してきた。ここでは、自由記述を検討し、原発事故が家族に与えた影響を家族関係の組織化の水準という視点から考察を試みた。その結果、原発事故は家族の親子関係、夫婦関係、その他家族(祖父母・親戚)との関係について、特に事故から2016年頃までは、組織化の水準を下げていることが明らかである。

親子関係においては、2013年の第1回調査においては、108件と他の家族関係に比べて圧倒的な数を示していたものの、2016年には29件と約4分の1近くに減少し、2019年に親子関係に言及しているものは1件も見られなかった。これは、親子関係については、事故から約2年が経過した

2013年の時点では、まだ線量も高いうえに、子どもも幼く、子どもの現在や将来にわたる健康影響の不安が大きかったことが伺える。結果、子どもへの健康影響を防ぐためのリスク対処行動をとる。それは、これまでの住み慣れた場所を離れ、また父親とも離別し、母子だけで遠方への避難を選択したり、現地に留まったとしても外遊びを制限せざるを得なかったりする。こうした状況に、母子が大きなストレスを抱えていたことがわかる。我が子を守るが故の母親としての行動が、一方で子どもの自由な行動を禁止し、健全な発達を阻害しているかもしれないとの不安との間で葛藤し、親子関係の組織化の水準を低下させている。しかし、そうした親子関係は、2016年以降からは一気に減少している。この背景には、時間の経過や除染等により放射線レベルが低下したことによるある程度の安心感に加えて、子どもも成長し、小学校という集団生活の中で親の意向のみでは、子どもの行動や生活を制御できないという、いわばあきらめの気持ちもあっただろう。その結果、親子間でのストレスが減少したと言えるかもしれない。また、子どもが幼い時期の親子間の組織化の水準の低下は、軌道修正が相対的にしやすいのかもしれない。

一方、夫婦関係やその他の親族との関係については、2013年の第1回調査時点でそれぞれ29件と28件であり、親子関係ほど言及されていない。事故からそれほど時間が経過していない時点では、母親の関心の焦点は、子どもの安心・安全に向かっており、夫婦関係やその他の親族との関係は、二の次になっているのかもしれない。しかし、その間、夫婦関係やその他の親族との関係に何も問題がなかったかと言えば、そうとは言えない可能性がある。2015年の第3回調査以降、親子関係への言及が急激に減少してからも、夫婦関係やその他の親族との関係についての言及はその数は少ないものの、続いている。その内容も、事故直後の避難やその他のリスク対処行動についての認識のずれが、継続的に母親のストレスとなって残っていることを示している。これは、親子関係と異なり、修復が困難であることを物語っている。

ここまで見てきたように、原発事故は家族関係を直撃した災害である。今も性別役割分業として息づいている子どもの健全な発達を担うとされる母親が、原発事故という未曾有の災害に直面した時に、子どもを守るための責任を、夫やその他の親族から押し付けられ、そして何より母親自身が背負い込み、親子関係や夫婦関係、そしてその他の親族との関係に亀裂を生んでいる。この亀裂は、親子関係については子どもが幼かったこともあり、ある程度修復できたものの、夫婦関係やその他の親族との関係については、おそらくもやもやとした感覚として残り続けている可能性がある。

また、本稿においては触れなかったものの、家族を取り囲む、ママ友や近隣住民などの地域社会との関係、そして県外、さらには国外からのまなざしや言論などが、子どもの現在や今後について母親に迷いや葛藤を引き起こし、ストレスを生じさせている。それが、おそらく日常を送る中でもっとも身近な家族関係に波及していると考えられる。

こうして、母親を取り巻くいくつものシステムとの緊張関係は、事故から10年以上が経過して、一見見えにくくなっているものの、潜在的に持続していることが予想される。この潜在的なもやもや感が声に出されず母親の心の中だけに埋もれていくことがないように、私たちは母親の声なき声に耳を傾けなければならない。

4. 調査結果にみる原発事故体験の特徴

福島では、原発事故がなければ受苦せず済んだはずの不安、家族や地域コミュニティにおける葛藤、悩み、軋轢、出費、名乗れない状況、いろいろな意味で当たり前の生活ができなくなり、全人的被害というべきものがあつた。将来の不安、孤立・孤独感、不公平感、もやもやした感覚が依然、残っている。この10年余、除染が進み、生活も元に戻りつつあり、避難区域に比べれば、福島県中通りは落ち着いてきた。しかし、家族にも言えないトラウマを抱え、地域コミュニティでも語り合える雰囲気ではない。

トラウマを抱えたコミュニティでは、基本的信頼の浸食が起きる。自然

災害とは違い、有害物質がかかわる人為災害としての原発事故では、お互いに支え合うような共同性は失われる危険性が高い。そうしたトラウマを抱えたコミュニティに共通する代表的な特徴を福島県中通りにおける長期追跡調査結果の中にもみることができる。例えば、「将来不安」とも関わる放射能の情報に関する不安に加え、補償をめぐる不公平感、いじめや差別への不安の三つが高止まりしているのだが(図1)、その背景には、政府や東京電力、専門家といった他者への基本的信頼が低下していることの影響が考えられる。

これまで調査してきた福島県中通りは、避難区域に隣接し、健康影響の不確実性が高く、リスクへの対処が先鋭に問われる地域である。こうした地域特性のため、事故直後から放射能リスクの受け止め方も、避難、外遊び、地元産食材の使用などについての対処の仕方も多様であった。また、避難指示区域から移住した避難者と以前から中通りの住民である人たちとの間で、あるいは避難区域外避難者への住宅支援打ち切りにおいては、自主避難者と中通りに滞在する住民との間で、補償や支援策をめぐる葛藤や分断が生じていた。

調査対象者⁴は、冒頭にも示した通り、原発事故当時の3歳児とその母親(保護者)に限定した。それは以下の二つの理由からである。第1に、2008年度出生児は原発事故当時1～2歳で、本格的に外遊びをはじめめる時期であり、子どもの生育過程において保護者が初めてさまざまな選択を迫られる年齢である。したがって、目に見えない持続的な放射能被ばく不安がもたらすさまざまな影響を判別する上で最も適した年齢層であると判断した。第2に、3歳児健診によって健康・生育状況が判明する時期でもあり、その後の生育状況を追跡研究することにより、幼少期の生活環境がその後の成長・発達にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることができる考えたからである。これまでの長期追跡研究の知見では、幼少期

4 「調査対象者」は「調査参加者」と同じ意味であるが、文脈に応じて使い分けていることを断っておきたい。

の生活環境と人生で起こった出来事の積み重ねの結果として、心身の健康、認知機能、学業や就職など社会的達成度が大きく規定されることが示されている。

原発事故後の日常生活の変化について、2013年1月の第1回調査では12項目を「事故直後」、「事故半年後」、「この1ヶ月間」の三つの時期に分けて質問した。第2回調査以降は、上記12項目に加えて、「放射能に関してどの情報が正しいのかわからない」、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」の2項目を追加して14項目を質問した。ここでは、2013年1月から2021年1月までの9時点の原発事故による生活変化の傾向を示す(図1)。

原発事故後の生活変化にはいくつかの傾向が確認できるが⁵、ここで注目したいのは、事故から10年近く経過した時点で、約5割以上が「あてはまる」(「どちらかといえばあてはまる」を含む。)と回答し、高止まり傾向が続いている2つの項目、「補償をめぐる不公平感」、「放射能の情報に関する不安」である。

原発事故という「非日常」からゆっくりと「日常」へ戻りつつあっても、生活や意識のなかでは今なお影響が続いていることがこれらの調査結果からわかる。とりわけ、補償の不公平感、放射能に関する情報不安、いじめや差別への不安、健康影響不安、経済的負担感、保養意欲などが高い比率のまま推移しており、放射能への対処をめぐる認識のずれが持続していることが表れている。すなわち、原発事故から10年以上が経過したものの、子どもをもつ母親の生活にはいまだ大きな影響が及んでいるということを示している。

5 その他に、次の三つの傾向がみられる。ゆるやかな減少傾向にありながらも約3割の方が「あてはまる」(「どちらかといえばあてはまる」を含む。以下同様)と回答しているのは、「健康影響への不安」、「経済的負担感」、「保養への意欲」、「子育てへの不安」の四つの項目である。「あてはまる」が急激に減少し、その後、横ばいとなっているのは、「地元産の食材を使用しない」、「洗濯物の外干しをしない」、「避難願望」である。事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移しているのは、「放射能への対処めぐって配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」である。

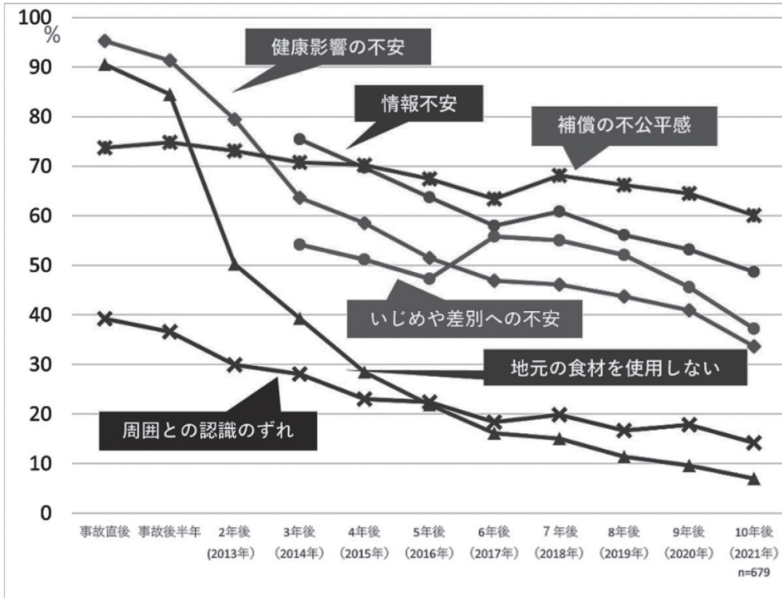


図 1 原発事故後の生活変化

出典：筆者作成

また分断という観点でみると、福島における分断は次の三つの項目で観察できる。第1に、補償をめぐる不公平感である。これは主に福島県内の浜通りとその他の地域との間の分断として現れている。第2に、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」（以下、「いじめ・差別への不安」）は、近所や友人・知人の間でも生じるが、多いのは、県外と福島出身者・在住者との間に生じている。第3に、放射線監視装置（モニタリングポスト）の撤去をめぐる賛否は、同じ地域で子育て中の母親同士の分断である。

2021年1月の第9回調査では、原発事故の風化を「感じる」という回答が初めて6割を超え、「どちらかといえば感じる」を加えると、9割近い結果になった（図2）。「風化を感じる」という回答には10年を節目と

して、「前を向こう」という内面からの声と、忘れられることに対する不安の両方の側面がある。風化には、いつまでも事故に引きずられず日常生活に戻りたいという思いと、将来あるかもしれない事故の影響について忘れることができないという複雑な思いが交差している。

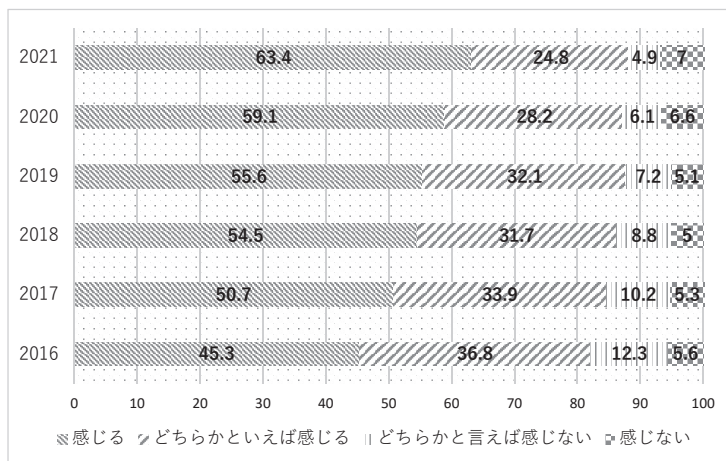


図 2 原発事故の風化

出典：筆者作成

本調査はすでに述べたように、福島県中通りの限られた世帯を対象としたものである。したがって、本調査結果が福島のすべてにあてはまるとは言えない。ただ、福島は人為災害によって有害物質による大規模な環境汚染が疑われる地域であり、広範な地域が被害の対象となっている。こうした環境汚染が個人の心身の健康への影響だけでなく、家族、地域、友人・知人といったコミュニティの有機的な組織にも影響を与え、基本的信頼を低下させ、それが長期にわたって地域の集会的アイデンティティの損傷や集会的効力感の低下を招来する可能性がある。加えて、補償問題などをめぐる紛争が長期化することが予想されるという点が特徴としてあげられよう。

5. 修復的なアプローチ

20世紀の科学技術の「粋」を集めた原子力発電所で起きた未曾有の出来事は人間の「からだ」「こころ」「きずな」に長期的にどのような帰結をもたらすのか。なぜ人為災害なのに被害者同士で分断が生じるのか。さらに、どうすれば家族、地域、社会における分断を乗り越え、傷を癒しているか。福島の現状に対する実態把握に基づき、多様な関係者が宥和せずとも、共存できる相互了解を可能にする知的枠組みと関係者間の取り組みを分断修復学として創成しようとしてきた。

私たち「福島子ども健康プロジェクト」が原発事故後、調査と介入研究を通じて関わってきた福島県中通り9市町村は、政府による強制の避難指示が出た区域の外側に該当する。政府にとって「避難区域外」であったこの地域が、原発事故後の13年間、そのまま平穏無事の安全地帯ではなかった。福島県中通り9市町村に住まう子どもや家族にとっては不安と疑心暗鬼と、人間関係の葛藤やコンフリクトを伴い、紛れもなく「ストレス圏内」であった。「避難区域外、ストレス圏内」の福島県中通りで、これまで10年余、私たちが子育て中の母親を調査対象に研究してきたこともあって、原発事故が生み出した最大の被害の一つが「家族の分断」であると考えている。本稿の冒頭に引用した高木久美子さんの発言の通り、原発事故は稼働中の原子力発電所が爆発し放射能をまき散らした環境破壊であるだけでなく、原発から遠く離れた地域に住んでいる親子、夫婦、祖父母や親戚といった身近な親密圏の人と人との関係性への重大な侵害であった。

原発事故と放射能による健康影響への感覚的なずれ、価値観や立場の違いから生じる不安や対処行動の差は、ときに家族に分断や排除をもたらすきっかけになる。いやむしろ、それまで隠れていたかもしれない分断を顕在化させたのかもしれない。その結果、それまでの個人を支えてくれるものとしての共同体がもはや存在しないということ、そして、自我の重要な一部が消え去ってしまったということに気づくようになった。今も尾を引いているこうした損なわれた人間関係を築きなおし、修復することはと

でも難しい。ただ、調査を通じてわかってきた課題を解決することができないからといって離れてしまうのではなく、いまなお、私たちはつながり続け、関わり続けている。

いじめ問題に焦点を当て、損なわれた人間関係を築きなおす修復的アプローチに長年取り組んでいるスクールソーシャルワーカーの山下英三郎は、関係の修復、関係のリハビリテーション、つながりといった言葉で表される修復的司法 (Restorative justice) のキーワードは、まさに現代人が手放してきた重要な要素を補完する概念だと指摘する。近代化の過程でわれわれの社会は、人と人との関係を寸断してきた。歴史の悠久な流れのなかで長年にわたって培われてきた地域共同体は、現代においてはほぼ消失しつつあると述べている。地域社会、学校、家族のいずれの場においても、人が豊かに交流し生活を享受している姿をイメージすることは難しい。われわれは身に受けた危害を適切に癒される方法と機会を見いだす必要があるし、人々が他者と調和的な関係を結び、人間関係の輪のなかで生きていくことができるような方法を、社会のなかに用意しておく必要がある。他者とのつながりを持ちにくい社会のなかで、孤立しつつ怒りや悲しみを抱きつつ生活する人々を放置しているような社会は、決して健全な社会とは言えない⁶。

修復的対話は、中立的な存在であるファシリテーターの進行によって、対立する当事者とそれぞれの関係者が対話によってトラブルを解決するというアプローチだ。ここで〈解決〉という言葉を用いたが、実際にはお互いが納得できる合意点に到達することとした方がいい。多くの人がこの〈修復的〉という言葉には馴染みがないため、新しいアプローチだと考えられがちだ。だが、実はそのルーツは古く、世界各地の先住民たちがトラブル解決の手段として用いていた方法だ。考え方や方法は近代に至るまで各地に残ってはいたが、近代化とともに影が薄くなっていた。それが現代にお

6 山下英三郎, 2012, 187-8頁。

いて再発見というか再評価されたというものだ。共通の考え方とは、人はみんなつながり合っており、それぞれが固有の価値を有しているという考え方だ。人間尊重の精神である。それを象徴的に表すのが、ニュージーランドの先住民であるマオリ族の間の言い伝えだ。そこでは、「どんなに悪いことをした人であっても、話し合いの場では1人の人間として尊重される」といわれており、まさに修復的アプローチを体現する象徴的な考え方だ⁷。

個人・集団間において生じる葛藤や対立を、関係者相互が対話によって平和的に解決する方法である修復的アプローチを福島でも応用できないか。調査と調査結果のフィードバック、対話の場などを通じて、こうした修復的なアプローチを試みてきた⁸。私たちがファシリテーターとなって、調査対象者同士の横のつながりを創ることと、対話を行うことを目的とした「語り合いの場ふくしま」に参加したあるお母さんは、「福島県に暮らすもの同士、今回のように吐き出したいものは吐き出してまた明日を生きていければ良いと思いました」と感想を述べている。しかし、「子育てセミナー」と命名したものも含めて「語り合いの場ふくしま」はこれまで4年ほど開催しているが、この対話の場への参加者はきわめて少数であり、参加者も固定し、広がりには欠けている⁹。

家族や地域が抱える集合的トラウマから回復させる治療的介入についてはまだ不明なことも多い。人々を古いコミュニティから離脱させ、新しいつながりとの再接続を試みるのが集合的トラウマからの回復には重要である。だが、性別役割分担の規範が根強い日本社会においては、子育てをはじめとする家族の再生産機能は圧倒的に母親にその負担がのしかかる一方、家族内での力関係はその反対の傾向にある。こうしたジェンダー不平

7 山下英三郎, 2023, 55-56 頁。

8 成元哲・牛島佳代, 2023, 『原発分断と修復的アプローチ——福島原発事故が引き起こした分断をめぐる現状と課題』の第8章と第9章を参照。

9 これまでの「語り合いの場ふくしま」の開催履歴に関しては、「福島子ども健康プロジェクト」のホームページ「ワークショップ（語り合いの場ふくしま開催記録と、子育てセミナー開催記録）」を参照。

等と多様な生き方が認められない規範が3・11の後、「母子避難」という言葉まで生み出した。こうした社会構造に定着しているジェンダー不平等による力関係に及ぶ問題を改善するのは容易ではない。

福島県内の家族、近所、知人の間、避難区域と避難区域外、福島県内と県外といった幾重にも分断が見え隠れする。それらは常に顕在化しているわけではないし、治療を必要とするほど家族や地域コミュニティが機能不全を起こしているわけではない。だが、日常生活において「もやもや感」、「語りにくさ」、「いまさら口にしても仕方ない」といった様相を呈し、家族や地域社会におけるコミュニケーションや人間関係に影を落としている。集合的トラウマはこのように、長期間にわたり地域に影を落とすであろう。その修復のためには、自分では理解し得ない他者とともにいるための技法が構想される必要がある。それぞれの違いが人々の心の障壁になるのではなく、一人の人間の中にも多様な道程が、当たり前のように受け入れられる社会の在り方を目指すのが分断修復学である。

多様な関係者が宥和せずとも、共存できる相互理解を可能にする知的枠組みと関係者間の取り組みはいかにして可能になるだろうか。まずは被ばくからの自由、すなわち、無用な被ばくを強いられることなく健康を享受する権利を確立すること、そして、被ばくをめぐる考え方や多様な選択を可能にするよう支援することにある。

各々が多様な選択を可能にする社会の仕組みを整えるために、こういった試みを、様々な主体と関係機関が連携し、長期にわたって進めていくことが求められる。その前に確認しておきたいのは、分断によって引き起こされた集合的トラウマが必ずしも負の側面ばかりではないことを認識することである。集合的トラウマは、困難を乗り越える集団が持つ回復力、集合的創造力の源泉となりうるからである。人間は、関係性の中で傷つけあってしまうという弱さを持つが、同時に、人と人の関係の網の目の中でトラウマは癒していける。それが集団の創造力の基盤となる。

引用・参考文献

- Abramowitz, Sharon, 2005, "The poor have become rich, and the rich have become poor: Collective trauma in the Guinean Languette", *Social Science & Medicine* 61(10):2106-2118.
- アービター・ナヤ、ムレン・ロッド、小松原織香、坂上香、2020、「インタビュー
いつか来る春を待ちながら——受刑者の心の変化と『プリズン・サークル』」『世界
界』,930:134-144.
- Alexander, Jeffrey C.eds, 2004, *Cultural Trauma and Collective Identity*,
University of California Press.
- 蟻塚亮二・須藤康宏, 2016, 『3・11 と心の災害——福島にみるストレス症候群』大
月書店.
- , 2023, 『悲しむことは生きること：原発事故と PTSD』風媒社.
- 安克昌, 2001, 『心の傷を癒すということ』角川書店.
- Australian Red Cross, 2018, *Review of the Literature on Best Practices Before,
During and After Collective Trauma Events*, Australian Red Cross.
- Brady, Kate, Agathe Randrianarisoa and John Richardson, 2018, *Best Practice
Guidelines: Supporting Communities Before, During and After Collective
Trauma Events*, Australian Red Cross.
- Bourdieu, Pierre, 1993, *La Misere du Monde, Seuil*. (櫻本陽一・荒井文雄訳『世界
の悲惨 (全3分冊)』藤原書店.)
- , et al., translated by Priscilla Parkhurst Ferguson and others, 1999, *The
Weight of the World: Social Suffering in Contemporary Society*, Stanford
University Press.
- Bromet, Evelyn J., Jphn M. Havenaar and Lin S. Guey, 2011, "A 25year
retrospective review of the psychological consequences of the Chernobyl
accident", *Clinical Oncology*, 23:297-305.
- , 2014, "Emotional consequences of nuclear power plant disasters", *Health
Physics* 106(2): 206-210.

- Caruth, Cathy 1996, *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative, and History*, Johns Hopkins University Press. (下河辺美智子訳,2005,「トラウマ・歴史・物語」みすず書房.)
- 大門大朗・宮前良平・高原耕平, 2020, 「集合的トラウマと災害復興に関する理論的検討——カイ・エリクソン『Everything in its Path』を読み返す」『日本災害復興学会論文集』 16: 37-46.
- De Leon, George, 2000, *The Therapeutic Community: Theory, Model, and Method*, Springer Publishing Company.
- De Thierry, Beetsy, 2021, *The Simple Guide to Collective Trauma: What it is, how it affects us and how to help*, Jessica Kingsley Publishers.
- Erikson, Kai T., 1976a, *Everything in Its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood*, Simon & Schuster. (宮前良平・大門大朗・高原耕平訳, 2021, 『そこにすべてがあった——バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学』夕書房.)
- , 1976b, “Disaster at Buffalo Creek. Loss of Communitality at Buffalo Creek”, *America Journal of Psychiatry*, 133(3): 302-305.
- , 1991, “Radiation’s Lingering Dread”, *Bulletin of the Atomic Scientists*, 47(2): 34-39.
- , 1994, *A New Species of Trouble: The Human Experience of Modern Disasters*, W.W. Norton and Company.
- , 1995, “Notes on Trauma and Community”, in Cathy Caruth ed., *Trauma: Explorations in Memory*, Johns Hopkins University Press. (榎田建二訳,2000,「トラウマと共同体に関する覚書」下河辺美知子訳『トラウマへの探求——証言の不可能性と可能性』作品社、278-283。)
- , 2017, *The Sociologist’s Eye: Reflections on Social Life*, Yale University Press.
- Freud, Sigmund, 1939, *Der Mann Moses und Die Monotheistische Religion*. (中山元訳, 2020, 『モーセと一神教』光文社.)

- Freudenburg, William R., 1997, "Contamination, Corrosion and the Social Order: An Overview", *Current Sociology*, 45(3): 19-39.
- Gergen, Kenneth J., 2009, *Relational Being: Beyond Self and Community*, Oxford University Press. (鮫島輝美・東村智子訳, 2020, 『関係からはじまる——社会構成主義がひらく人間観』 ナカニシヤ出版.)
- 藤岡淳子編, 2019, 『治療共同体実践ガイド——トラウマティックな共同体から回復の共同体へ』 金剛出版.
- Havenaar, Johan M., Cwikel, Julie, Bromet, Evelyn, eds., 2002, *Toxic turmoil: Psychological and societal consequences of ecological disasters*. Springer.
- Herman, Judith L., 1992, *Trauma and Recovery: The Aftermath of Violence from Domestic Abuse to Political Terror*, Sage Publications. 中井久夫訳, 1999, 『心的外傷と回復<増補版>』 みすず書房.)
- , Diya Kallivayalil and Members of the Victims of Violence Program, 2018, *Group Trauma Treatment in Early Recovery: Promoting Safety and Self-care*, Guilford Press.
- ハーマン・ジュディス, 1999 「トラウマ、家族、コミュニティー」「こころのケアセンター」編 『災害とトラウマ』 みすず書房, 133-146.
- Hirschberger, Gilad 2018, "Collective Trauma and the Social Construction of Meaning", *Frontiers in Psychology* 9.
- ほようかんさい編, 2021, 『こんど、いつ会える？ 原発事故後の子どもたちと、関西の保養の10年』 石風社。
- 池田香代子・貝沼博・児玉一八・清水修二・野口邦和・松本春野・安齋育郎・一ノ瀬正樹・大森真・越智小枝・小波秀雄・早野龍五・番場さち子・前田正治, 2018, 『しあわせになるための「福島差別」論』 かもがわ出版。
- Jakko Seikkula, Tom Erik Arnkil, 2019, *Dialogical Meetings in Social Networks (The Systemic Thinking and Pracuice Series)*, Routledge. (高木俊介・岡田愛訳, 2016, 『オープンダイアログ』 日本評論社.)
- 金子勇, 2011, 「環境破壊から社会の復興再生へ——集団的ストレス状況の社会的

分析』『北海道大学文学研究科紀要』135：89-137.

兼子論, 2019, 「トラウマの概念の社会学的応用とその意義——文化的トラウマ論の検討から」『社会学評論』69(4): 453-66.

———, 2021, 『市民社会の文化社会学——アレクサンダー市民圏論の検討を中心に』晃洋書房.

Kardiner, Abram, 1947, *War Stress and Neurotic Illness (Second Edition)*, Paul B. Hoerber. (中井久夫・加藤寛共訳, 2004, 『戦争ストレスと神経症』みすず書房.)

Karenian, Hatsantour, Miltos Livadetis, Karenian, Sirpouhi Karenian, Kyriakos Zafiriadis, Valentini Bochtsou and Kiriakos Xenitidis, 2010, “Collective Trauma Transmission and Traumatic Reactions Among Descendants of Armenian Refugees”, *International Journal of Social Psychiatry*, 57(4):327-337.

「こころのケアセンター」編、1999、『災害とトラウマ』みすず書房.

Kim Yoshiharu, Atsuro Tsutsumi, Tskashi Izutsu, Noriyuki Kawamura, Takao Miyazaki, and Takehiko Kikkawa, 2011, “Persistent distress after psychological exposure to the Nagasaki atomic bomb explosion”, *British Journal of Psychiatry*, 199:411-416.

木村真三, 2014, 『「放射能汚染地図」の今』講談社.

Krieg, Anthea, 2009, “The Experience of Collective Trauma in Australian Indigenous Communities”, *Australasian Psychiatry*, Vol.17, Supplement 1:S28-32.

Loganovsky, Konstantin N. and Nataliliya A. Zdanevich, 2013, “Cerebral basis of posttraumatic stress disorder following the Chernobyl disaster”, *CNS Spectrums*, 18(2):95-102.

Lifton, Robert J, 1991, *Death in Life: Survivor of Hiroshima*, Random House. (榎井迪夫, 湯浅信之・越智道雄・松田誠思訳, 2009, 『ヒロシマを生き抜く——精神的考察(上)(下)』岩波書店.)

前田正治編著, 2018, 『福島原発事故がもたらしたもの——被災地のメンタルヘルスに何が起きているのか』誠信書房.

- Micale, Mark S, and Lerner Paul, 2001, *Traumatic Pasts: History, Psychiatry and Trauma in The Modern Age, 1879-1930*. Cambridge University Press. (金吉晴訳, 2017, 『トラウマの過去——産業革命から第一次世界大戦まで』みすず書房.)
- 松浦直巳・八木淳子・福地成・榎屋二郎, 2018, 『被災地の子どものケア——東日本大震災のケースからみる支援の実際』中央法規.
- 宮地尚子, 2011, 『岩波ブックレット No.815 震災トラウマと復興ストレス』岩波書店.
———, 2013, 『トラウマ』岩波書店.
———, 2018, 『環状島 = トラウマの地政学 (新装版)』みすず書房.
———編, 2021, 『環状島へようこそ——トラウマのポリフォニー』日本評論社.
- 森茂起, 2005, 『トラウマの発見』講談社.
- 中井久夫, 1999, 「災害と日本人」「こころのケアセンター」編『災害とトラウマ』みすず書房, 173-192.
———, 2018, 『中井久夫集 (7)1998-2002 災害と日本人』みすず書房.
———, 2019, 『中井久夫集 (9)2005-2007 日本社会における外傷性ストレス』みすず書房.
- 直野章子, 2011, 『被ばくと補償——広島、長崎、そして福島』平凡社.
- Ohta, Yasuyuki, Mariko Mine, Masako Wakasugi, Etsuko Yoshimine, Yachiyo Himuro, Megumi Yoveda, Sayuri Yamaguchi, Akemi Mikita and Tomoko Morikawa, 2000, "Psychological effect of the Nagasaki atomic Bombing survivors after half a century", *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 54, 97-103.
- Ohtsuru, Akira, Koichi Tanigawa, Atsushi Kumagai, Ohtsura Niwa, Noboru Takamura, Sanae Midorikawa, Kenneth Nollet, Shunichi Yamashita, Hitoshi Ohto, Rethy K Chhem and Mike Clarke, 2015, "From Hiroshima and Nagasaki to Fukushima 3 Nuclear disasters and health: lessons learned, challenges, and proposals", *Lancet*, 386: 489-497.
- O'Loughlin, Michael, 2009, "A Psychoanalytic Exploration of Collective Trauma

- Among Indigenous Australians and a Suggestion for Intervention”, *Australasian Psychiatry*, 17, Supplement 1: S33-36.
- Picou Steven J., 1996, “Toxins in the Environment, Damage to the Community: Sociology and the Toxic Tort”, in Pamela J. Jenkins and Stene Kroll-Smith eds., *Witnessing for Sociology: Sociologists in Court*, Praeger: 211-224.
- , Brent K. Marshall and Duane A. Gill, 2004, “Disaster, Litigation and the Corrosive Community”, *Social Forces*, 82(4): 1493-1522.
- Raphael, Beverley, 1986, *When Disaster Strikes: How individuals and Communities Cope with Catastrophe*. Basic Books. (石丸正訳, 2016, 『災害の襲うとき——カタストロフィの精神医学』 みすず書房.)
- Ron, Eyerman, 2015, *Is This America?: Katrina as Cultural Trauma*, University of Texas Press.
- , 2019, *Memory, Trauma, and Identity*, Palgrave Macmillan.
- Reuben, Hill, 1971, *Families Under Stress: Adjustment to the Crises of War Separation and Reunion*, Praeger Pub Text.
- 坂上香, 2012, 『ライフアーズ—— 罪に向きあう』 みすず書房.
- 2012, 『プリズン・サークル』 岩波書店.
- サン = テグジュベリ著, 河野万里子訳, 2006, 『星の王子さま』 新潮社.
- Saul, Jack, 2013, *Collective Trauma, Collective Healing: Promoting Community Resilience in the Aftermath of Disaster*, Routledge.
- Seikkula, Jaakko and Tom Erik Arnkil, 2019, *Dialogical Meeting in Social Networks (The Systemic Thinking and Practice Series)*, Routledge. (高木俊介・岡田愛訳, 2016, 『オープンダイアログ』 日本評論社.)
- セルジュ・ティスロン著, 阿部又一郎訳, 2016, 『レジリエンス——こころの回復とはなにか』 白水社.
- Shamai, Michal, 2015, *Systemic Interventions for Collective and National Trauma: Theory, Practice and Evaluation*, Routledge.
- Solnit, Rebecca, 2009, *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities*

- That Arise in Disaster*, Penguin Books. (高月園子訳, 2010, 『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』 亜紀書房.)
- 下川辺美知子, 2006, 『トラウマの声を聞く——共同体の記憶と歴史の未来』 みすず書房.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満・阪口祐介, 2015, 『終わらない被災の時間——原発事故が福島県中通りの親子に与える影響 (ストレス)』 石風社.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満, 2017, 「原発不安に関する考察——福島県中通りの子育て中の母親の不安の諸相とその特質」『中京大学現代社会学部紀要』 11(2): 71-98.
- 成元哲・牛島佳代, 2020, 「持続的なトラウマ——原発不安の変化と特質に関する研究」『中京大学現代社会学部紀要』 14(2): 79-112.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満, 2021, 「原発事故 10 年、コロナ禍の福島の母たちの声——2021 年調査の自由回答欄にみる福島県中通り親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』 15(1): 93-122.
- 成元哲・牛島佳代, 2023, 『原発分断と修復的アプローチ——福島原発事故が引き起こした分断をめぐる現状と課題』 東信堂.
- 高橋若菜編, 2022, 『奪われたくらし——原発被害の検証と共感共苦 (コンパッション)』 日本経済評論社.
- 竹沢尚一郎, 2022, 『原発事故避難者はどう生きてきたか——被傷性の人類学』 東信堂.
- 田中雅一・松嶋健編, 2018, 『トラウマ研究 1 トラウマを生きる』 京都大学学術出版会.
———, 2019, 『トラウマ研究 2 トラウマを共有する』 京都大学学術出版会.
- Tcholakian, Lara A., Svetlana N. Khapova, Erik van de Looand Roger Lehman, 2019, “Collective Traumas and the Development of Leader Values: A Currently Omitted, but Increasingly Urgent, Research Area”, *Frontiers in Psychology*. 10.
- 戸田典樹編, 2016, 『福島原発事故漂流する自主避難者たち——実態調査からみた課題と社会的支援のあり方』 明石書店.

牛島佳代・成元哲・松谷満, 2014, 「福島県中通りの子育て中の母親のディストレス
持続関連要因——原発事故後の親子の生活・健康調査から」『ストレス科学研究』
29: 84-92.

—————・向井良人・除本理史, 2019, 「福島から照射する水俣病をめぐる分
断修復の現状と課題」『中京大学現代社会学部紀要』13(2): 83-126.

Van der Kolk, Bessel A., 1986, *Psychological Trauma*, American Psychiatric
Press. (飛鳥井望・前田正治・元村直靖訳, 2004, 『サイコロジカル・トラウマ』
金剛出版.)

—————, 2015, *The Body Keeps the Score: Brain, Mind, and Body in the
Healing of Trauma*, Penguin Books. (柴田裕之訳, 2016, 『身体はトラウマを記
録する——脳・心・体のつながりと回復するための手法』紀伊國屋書店.)

Vyner, Henry.M., 1988, *Invisible trauma: The psychosocial effects of invisible
environmental contaminants*, Lexington Books.

Wilkinson, Iain, 2004, *Suffering: A Sociological Introduction*, Polity.

山下英三郎, 2012, 『修復的アプローチとソーシャルワーク——調和的な関係構築
への手がかり』明石書店.

—————, 2023, 『迷走ソーシャルワーカーのラプソディ——どんなときでも、「い
いんじゃない？」と僕は言う。』明石書店・Kindle 版.

Young, Allan 1995, *The Harmony of Illusions: Inventing Post-Traumatic Stress
Disorder*, Princeton University Press. (中井久夫・大月康義・下地明友・辰野剛・
内藤あかね共訳, 2001, 『PTSD の医療人類学』みすず書房.)